

## 大震災の歌 谷岡亜紀

震災と、それ以後の原子力発電所事故の問題を、誰がどう歌ったか。それがものすごく気になる。私だけではないだろう。特に直接的に被災した人や、近隣にあつて現在も放射能の直接的な影響下にある人ではない、例えば関東以西に住む歌人たちが、それをどう歌った（歌わなかった）か。震災と原子力事故に、どのような距離を、スタンスを、取ったか。そのことは、私自身の歌の今後にも大きく関わるように思える。

- ・言葉がない言葉がないと言ひながら言葉語る人間の言葉
- ・塩気だつ荒磯にありしなきがらの泥とへドロを洗ひし人ら
- ・残り立つ墓地の祖霊を今もなほ見えざるものが汚染しをらむ
- ・当事者であるかなきかを問ひてくる大きく燃ゆる野焼きの炎

伊藤一彦『待ち時間』

- ・被災の子の卒業の誓ひ聞くわれは役に立たざる涙流さず

- ・尊大にからから鳴つてこたへたる人はかならずわれらならずや
- ・あたらしいうつつに晴れた一枚の空より白いシートを剥がす
- ・盛り土は何を葬りし土ならむたしかに何かを葬りにけむ

米川千嘉子『あやはべる』

- ・焼けざりしことはさらなる悲しみか屋根に乗り上げ漁船動かす
- ・クライストチャーチでの死者一名の確認されにき三月二十八日
- ・パンダ観れば、桜の咲けば、一ミリづつ幸せは来む生きぬる限り
- ・打ち切られまた打ち切られ悲しみはあきらめの皮膜まとひゆく

のか

栗木京子『水仙の章』

- ・忘れようとしている町なのかも知れず 夜盗のごとく我は歩めり
- ・原子炉ははるかにあれど大海の青きひかりに何も見えない
- ・顔を淡く消されていたり原子炉に働きし人はテレビに語る
- ・蟻酸のようなものに世界は満ちゆけり知つてゐるのにほほえみながら

吉川宏志『燕麦』

私にはこれらの歌への〈答え〉はない。ありきたりな言い方になるが、やはりそれでも。ただ、これらの歌を読むことで、〈問い〉だけが私の中で連鎖してゆく。それが、私の置かれた現在である。そして、それでいい（というか、今はそれしかない）と思っている。これは言い逃れだろうか。それもわからない。

「ある瞬間、ぼくたちは、絶句する。それは、いままで使つていたことばを、もう使えない、と感じる時だ」

「ぼくたちは、目の前の光景が理解できない。理解するために、ことばが必要で、つまり、文章にしなければならぬ。けれど、ぼくたちがふだん読んでゐる文章、『世間』で『いい文章』だと思われているものは、こんな時、役に立たない」

高橋源一郎『非常時のことば』

震災の後で、改めて我々の多くが言葉について考え、言葉の無力について考えた。それに関する歌もたくさん発表された。私もその一人である。それらはどこか類型的な印象を与えたり、或る意味で現にひとつの類型だったとも言える。けどそれでも。

やはりいま私は、言葉について考えなくてはいけない。大震災以後の日本にあつて、そこそが、私のもっとも切実な（かろうじて当事者としての責任を取り得る）〈現場〉だからである。